

【別紙様式1】

平成24年度「県立学校復興交流推進事業」実施報告書 ～復興支援活動 これからの岩手を担う人材の育成～

[花北青雲高等学校]

1 事業目的

総合生活科の学校設定科目「生活産業経営実践」における社会に貢献する人材の育成に資すること。

2 活動内容

名称	実施日	活動場所	参加対象	参加人数
(1)被災地視察	6月22日（金）	大槌町内	総合生活科3年	36名
(2)商品開発	7月～11月	花北青雲高校	総合生活科3年	36名
(3)被災地支援交流	12月4日（火）	大槌町内	総合生活科3年	36名
(4)大槌高校生との交流	12月16日（日）	大槌高校	総合生活科3年	8名

3 実践事例

はじめに

家庭の専門学科である総合生活科は、コミュニケーション能力を伸ばしながら、衣食住や保育、高齢者の看護や介護などを専門的に学び、地域に貢献する人材の育成を推進している。特に3年生で履修する、学校設定科目『生活産業経営実践』は、1年生で学習した「生活産業基礎」を発展させ、社会の経済活動を担う一員として相応しい考え方や態度を養い、広い視野に基づいて、考える力や意志決定能力、他人と違う意見を持つ勇氣、地域と連携し、地域食材を活かした商品開発を行うなど、生徒が主体となり、実践的に学習している。昨年度は、地元花巻産の雑穀を使用した焼き菓子「雑穀ブッセ」を開発し、文化祭で販売し、その売上げを被災地の大槌高校とユニセフに寄付するという取り組みを行った。それらは生徒たちから自発的に出された願いを実現させたもので、大槌高校の生徒やユニセフの方を招いて話を伺うなど学びの幅が広がった。それらを後輩にも引き継ぎたいということで伝達会を開催した。今年度は被災地の支援について、人々との交流という形で実現させようと考えた。生徒たちは、同じ県民であるにも関わらず、今までその機会がなかなかないことに、後ろめたい思いを持っており、「是非やりたい！」との声が上がリ、今年度の授業の柱とした。



写真1:昨年度のユニセフ講座



写真2:大槌高校生を招いて(H23)

(1)被災地視察

まず、被災地の現状をこの目で見ることから始めた。6月22日、大槌町の一般社団法人「おらが大槌夢広場」の臼沢和行さんに依頼し、被災地を視察した。大槌町は津波とその後の火災で壊滅的な被害を受けた町である。被災前の美しい町並みの写真を見ながら説明を受け、この場所が町民にとってどんな場所だったか思いを馳せた。現地へ足を運び、自分の目で見るのがどんなに大切かを痛感した。視察で案内をしてくれた高田由貴子さんも被災者である。今、切望することは、被災地を忘れないでほしい、ということだった。賑やかだった町がなくなり、瓦礫があちこちに積まれた状況の町内で聞く体験は身につまされた。神戸大学の大学院生が、震災前の大槌町を再現しワークショップを行ったという話を聞いた。復興のためにも消えてしまった以前の町並みを再現することは意義あることを知る。昼食は復興食堂でいただき、こんな状況でも力強く前に進もうと努力している方々の話を聴き、私たちもその復興に関わっていきたいと思いを再確認した。



写真3:被災地視察の様子



写真4:神戸大学院生の活動について

(2)商品開発

その後、高校生である自分たちができる復興支援について何度も話し合った。被災地である大槌の町を活性化するにはどうしたらよいか。いろいろな案が出されたが、その中で、大槌の特産物と、私たちの住む花巻市の特産物をコラボした商品の開発という案が出た。試行錯誤の結果、三陸産のわかめと、花巻の特産物である雑穀や米粉を組み合わせた商品『わかめと雑穀のケーキとクッキー』を開発した。また、これまでの学習で訪問した地元の食品製造会社（黒川食品）の豆乳を加えるなど、総合生活科のこれまでの学びのまとめとしての要素も加えた。開発にあたり、大槌町の復興食堂の方々にも試食していただき、意見をいただいた。

開発商品は、本校の文化祭で販売し、その売上金をもとに、12月に行う支援交流の計画を立てた。



写真5:復興支援について話し合い



写真6:復興食堂の方に試食をお願い

(3)被災地支援交流

交流内容は、「被災地の子ども達や仮設住宅で暮らしている方々を笑顔で元気に！」というテーマに決め、準備を行った。どうしたら子どもたちが楽しんでくれるか、仮設住宅で暮らしている方々が喜んでくれるか、何度も話し合い、準備をした。

12月4日。午前中は、仮設の園舎である大槌保育園、津波の被害を受けたがその後再建できたおさなご幼稚園、そして養殖漁業を営む傍ら、規格外のわかめや茎を加工し、商品を作っているマリーンマザーズ吉里吉里の3か所に分かれて活動を行った。

大槌保育園は津波で流され、2011年6月に日本ユニセフ協会の支援を受け建てられたプレハブの園舎で保育活動をしている。当日は大荒れの天気で、園舎が浸水するのではないかというくらいの大雨だったが、子ども達は元気にそして温かく私たちを受け入れてくれ、交流会を行うことができた。園児と一緒にクリスマスツリーを製作したり、エプロンシアターや紙芝居の読み聞かせなどの活動を通しながら、触れあうことができた。



写真7:園児たちとクリスマスツリーの製作

マリーンマザーズ吉里吉里では、わかめかりんとうの製造過程を見学した。わかめかりんとうは、地元で子どものおやつとしてよく手作りしていたかりんとうをベースに、刻んだわかめを混ぜてはどうだろう！という地元の方々のアイデアから生まれた商品だということだった。生徒が開発した商品はこのわかめかりんとうをヒントにしたものであり、そのことも伝えた。

午後は、安渡公民館で、館長さんから大槌町を襲った津波の映像を見せてもらい、お話を伺った。「自然災害は誰でもどこでも起こりうること。今回の災害を自分の身に置き換えて考え、行動できる人になって欲しい。」ということばを生徒たちは真剣に受け止めていた。その後、住民の方々に生徒たちが手作りしたお正月飾りを手渡ししながら交流した。住民の方々と握手をしながら、その手の温かさ、言葉の優しさが心に触れ、思わず涙が溢れた生徒もいた。



写真8:仮設住宅のみなさんと

この交流を行うための経費、折り紙などの文具代や、お正月飾りを作る材料代、また、開発した商品をつくる材料代は文化祭での売上金を充てた。

(4)大槌高生との交流

今まで支援交流を行うために全面的に協力していただいた、一般社団法人「おらが大槌夢広場」の臼沢和行さんから、大槌高校生との料理交流会の企画の話があり、希望者8名と参加した。お互いに自己紹介をした後、大槌高校と花北青雲高校の生徒で混合班を作り、「地域食材をいかしたオリジナルの鍋料理」をテーマに食材購入のため、地元の商店に向いた。各班とも、話し合いをしながら、新鮮な魚介類を中心に購入し、大槌高校に戻り、調理を行った。その後、お互いに試食しながら交流を深めた。大槌高校生の中には、昨年度家庭クラブ員として本校に来て、被災当時の様子を話してくれた生徒もいた。現在は大槌町の子ども議会のメンバーとして活躍している生徒たちだ

った。同じ3年生ということで、偶然にも進学先が同じ生徒もおり、これからも交流していきたいとの思いを強めたようである。



写真9: どんな鍋にしようか相談



写真10: また逢えることを願って(大槌高校生と)

4 成果と課題

(1) 成果

今年度の活動である被災地域の方々との交流を通じて、将来にわたって地域社会の再生に積極的に貢献しようとする意識付けができたのではないかとと思われる。

この活動の成果として、生徒の感想の一部を紹介する。

今回、生活産業経営実践という授業を通して、本当に多くのことを学びました。まず、前向きに頑張ることの素晴らしさです。私たち内陸の住民が、もし天災で今回の様な被害にあったらどのような状態になるでしょう。沿岸の人たちは先人から、多くのことを語り継がれてきたと思います。そのことも活かされているのではないかと思いました。沿岸の人たちの前向きさには、本当に毎回驚かされました。前向きに考えるのにも勇気が必要だし、それを行動に移すにはもっと沢山の勇気や決断が必要だと思います。決断を下すとともに責任も背負うことになります。被害を受けて落ち込み、傷ついた精神状態の中で、それだけのものを背負う覚悟があって、物事を進めていて・・・本当に自分の小ささを知りました。それとともに、私という一人の人間が被災地の方々ために、どれだけのことができるだろうと考えさせられました。私たちは、これからの未来を担う若者であり、多くの可能性を秘めています。私たちの努力次第で、今回被災に遭った地域、その住民の心までも変えていけるのではないかと思いました。・・・(途中省略)・・・私がこれから社会という大きな集団の中に入り、生活していくうえで、どれだけ地元の力になれるだろうと考えたとき、その責任の大きさに気づかされました。私は、被災地に足を運び、多くの人と沢山の思い出をつくらせていきたいです。多くの楽しい思い出が、これからの励みになるように・・・。そうして繋がり、助け合うことの大切さを多くの人に語り継ぐことが私にできることだと思います。

もし私が5年後、理学療法士になるという夢を叶えられたら、その仕事を通して、相手の心に寄り添うことで社会貢献しようと思います。人はそれぞれ心にいろんな思いを持っているし、その置かれている現状も違います。相手と同じ目線に立ち相手を知ろうとする心、その心に寄り添い理解しようとする心。私は今回の実践を通して、このことを忘れてはいけないと思いました。

3月11日にこの地震が起きたとき、私の兄は沿岸にいました。地震直後は連絡をとることができましたが、津波がきた直後から連絡が取れなくなってしまいました。電気も通らず、携帯も通じない中でとても不安な時間を過ごしました。兄の安否が分からない時間が続いたので、警察に行き、捜索願も出しました。幸い、すぐに兄の生存がわかり、次の日には兄から直接メールが届きました。内陸にいる私でもこんなに不安な時間を過ごしたのに、被災地にいる方はどれだけ不安な時間を過ごしたのだろうと考えると、とても計り知れない苦しみだと思いました。

このような辛い状況におかれた岩手県も10年後には復興しなければいけないといわれています。10年で岩手県がどう復興していくかは、私たちのような若い世代の力が大いに必要になると思います。

私は、被災地訪問を通して、お金や物を送ることよりも被災地へ足を運び、被災地の方々と関わり、少しでも笑顔になってもらえるような活動をすることが何よりも大切なのではないかと気がつきました。そばで話を聞いたり、話したり、被災地の方に寄り添うことが大切だと思います。

私は、4月から岩手県職員として社会に出て働きます。この仕事は、地元である岩手県の皆さんの生活を支えるために先頭に立って仕事ができる素晴らしい仕事だと思います。私は、岩手県職員として、被災した岩手県が1日でも早く復興できるように、生まれ変わるように一生懸命働き、社会に貢献していきたいです。これからの岩手県の未来が明るく希望あるものになるように1日1日大切に過ごしていきたいです。

(2) 課題

本州一の面積を有する本県では、内陸部から沿岸部への移動には、バスで約2～3時間かかり、日帰りで交流を行う場合は時間が限られてしまう。そのため、訪問も1回きりではなく、せめて2～3回は行うとなると、その交通費の捻出が課題である。

5 まとめ

昨年度の3年生から伝えられたように、今年度の活動を来年度につなげるために3年生から後輩への伝達会を開催する予定である。今年度新たに生まれた多くの絆を、これからも繋いでいけるよう、その思いを伝えることも大切な使命である。

震災からの復興には、まだまだ多くの時間がかかるであろう。これからの地域を創りあげていく人材としての高校生力は重要であり、その育成を継続していきたいと考える。この活動を通して、人とのつながりを重視する総合生活科として、学びの本質が実現できたようにも思う。家庭の専門学科に学ぶ生徒として身につけた様々な技術を交流に役立てることは、まさに地域に貢献する人材の育成につながっている。自分は社会の一員であり、働くことで地域貢献していくということを生徒が認識できるよう、今後も生徒ともに取り組んでいきたい。